

自駒妃登美の
なでしこ
歴史物語
27

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ
白駒妃登美



儂い命を彼に捧げて

— 戦国ジャンニーズの妻・青柳 あおやぎ —

❁ 恋の病におかされて

戦国ジャンニーズ——。思わずそう叫びたくなる武将がいます。「丈高く、色あくまで白く、眉黒々と際たち、細い眼の眦が凛と上がった美丈夫で、たぐい稀なる気品を備えていた」。周囲からこう噂され、一目置かれたイケメン武将・木村重成です。

この名前を聞いて「ああ、あの大坂の陣で活躍した豊臣方の武将ね」とピンときた方、あなたはかなりの歴史通です。普通は「誰それ？」という感じですよ。重成は、秀吉の息子・秀頼の家臣であり、弟のような存在でもありました。あまりにイケメンで、大坂城の女官の大半が重成のファンだったとか。そんな彼に一目惚れし恋心を寄せたのが、今回の主人公・青柳です。

青柳は大坂城内一万の女官の中でナンバ

ーワンの美貌と謳われ、和歌の名手。重成に会ったその日から、切なくてご飯も食べられなくなり、寝込んでしまったそうです。彼女は病の床でこんな歌を詠みました。「恋詫て 絶ゆる命は さもあらはあれ しても哀といふ人もかな」(恋わずらいで死んでしまっても構いません。後に哀れなことだと言ってくれる人がいるかもしれませんから) 彼女の告白に対する重成の返歌がこちら。

「冬枯の 柳は人の 心をも 春待てこそ 結ひ留むらめ」(冬の柳は耐えて春を待ち、やがて人の心をつなぎとめるだろう) 重成は青柳の思いを受け入れたのです。

❁ たった四か月の結婚生活

慶長二十(一六二五)年一月、二人は結婚。「あれ、一六二五年？」ここでピンときたあな

青柳 豊臣秀吉が創設した七手組の組頭の一人・真野頼包の娘。和歌や琴に長け、美人でもあり、城内では評判の娘だった。木村重成と結婚、一男を出産したといわれる。

【イメージイラスト】
アオジマイコ